

## 佳作

## テーマ…未来のための今を生きる 「本当の『共に生きる社会』を目指して」

岩手県立盛岡第一高等学校3年 北田瑞季

小学生の時、友だちと下校中に身体障がい者とすれ違った。私は気にしないようにしていたが、友だちが「キモッ」と一言つぶやいた。とてもショックだった。なぜなら私には知的障がいをもつ妹がいるからだ。同じ人間なのに、精一杯生きているのにどうして見た目や行動だけで差別されてしまうのか。何もできない自分が悔しくてたまらなかつた。

「共生社会」とか「バリアフリー」とかさまざまな言葉がこの世界には存在している。しかしその言葉は表面的なものとしてしかとらえられていないと感じる。一番は人々の障がい者に対する偏見や差別は無くならないままでということだ。見た目だけで判断したり、障がい者の悪いイメージを決めつけたりしている人はたくさんいる。そのような人々に障がい者の努力や多くのよい所に目を向けてほしいと思つた。人々の本当の理解があつて初めて「共に生きる社会」が生まれるはずだ。そして理解を広げるためには障がい者が自身の障がいを強みにし、能力を発揮できる場が必要になる。障がいがあるからこそ普通の人になんい感性やさまざまな力を持つていたりする。例えば、目が見えない人は聴覚や嗅覚が普通よりも優れていたりする。私にとって妹の存在はとても大きい。妹がいなければ気づかなかつたことがたくさんあるし、妹と過ごすなかで自分自身が一番成長できたのではないかと思う。

今では会話も交わせるようになり姉妹喧嘩も毎日のようにしているが、妹が保育園に通っていた頃は特定の単語しか発することができなかった。自分の感情を言葉で伝えることができないため、怒りや悲しみなどは人の髪を引っ張ったり体をたたいたりして表すしかなく、毎日辛くてたまらなかつたのを覚えている。私も辛かつたが本人はもつと辛かつただろう。小学校に入学するところとどんな言葉を覚え、コミュ

ニケーションもうまくできるようになった。私がやっているよさを妹を始め、踊る楽しさや喜びを共有できるようになった。一人では何もできなかった妹が、人との関わりを通じていろいろな場面で成長している姿を見られることが、今、私にとって何よりの喜びだ。まだまだ大変なことやうまくいかないことはたくさんあるが、その分何かが達成できた喜びは人一倍大きい。差別している人たちは障がい者は何もできないと決めつけていないだろうか。人との関わりをなかでできることも増えるということを活かしてほしい。

高校生になつてからも差別によるショックを受けた。友だちとのメッセージのやりとりのなかで「ちて」という言葉があつた。知的障がい者の略だと言われ、とても悲しくなつた。このような言葉が社会に広まっていること自体がショックだつた。

共に生きる社会。言葉で言うのは簡単でも現状は厳しくまだまだ遠い世界だと私は考える。差別を完全になくすることは不可能かも知れないが、理解が広まることで社会は少しずつ変わっていくと思つた。私は大学に進んだら社会福祉を学びたいと考えている。障がい者と健常者をつなぎ、どちらも住みやすい社会を創るための方法を考え、その実現に向けて尽くしたいからだ。妹と歩んできた道のりとこれまでの体験を無駄にしないためにも私にはその役割がある。本当の「共に生きる社会」を目指して私ができることを見つけ、これからの人生も妹と共に精一杯生きていきたい。